

## 心の栄養剤No175-①「母子の最後の会話」

戦時中、特攻兵だけが首に白いマフラーを着けることが許されてきました。私にとって忘れることのできない思い出がそのマフラーにあり、それで本のタイトルにしました。

私は特攻基地のあった宮崎の赤江海軍基地に勤務していました。そこから385人の若者が飛び立っていきました。

彼らが首に着けていた白いマフラーは軍から支給されたものではありません。着けなくてもいいんです。ただ、特攻兵は17歳から23歳くらいの若い方ですから、死を飾るような思いからか、皆さん自然と着けるようになっていったのです。

氏本成文さんという18歳の青年の方のお話です。氏本さんは出撃の数日前、四国のお母様に「白いふんどし一枚と絹の白いマフラーを一本、送ってください」と手紙を書きました。

その手紙を読んだお母様は思うところがあって、ふんどしとマフラーを持って宮崎の基地まで来られました。

当時は白い布なんて店にはありませんから、お母様はご自分が結婚した時に実家から持ってきた長襦袢（ながじゅばん）の糸をとき、空襲警報下ですから、真っ黒な網をかぶせた電灯の下で、一晩中ふんどしとマフラーを縫ったそうです。

そして翌朝、あちこち空襲で鉄道が不通の中、乗り換え乗り換えしながら宮崎までやって来られたのです。

宮崎の基地に到着すると、基地の人が「今、練習中です。すぐ降りてきます」と言われました。お母様は息子さんと会ってどれほど嬉しかったことでしょうか。そして、縫い上げた白いマフラーと白いふんどしを息子さんに渡しました。でもその時、特攻機の飛行練習をしていたとは考えられない状況でした。燃料もなく、空はもうアメリカ軍が支配していて、飛び立つとすぐに撃ち落とされてしまうほどの戦況になっていたからです。

きっとその時は天候が悪くて、出撃したけれども視界が悪くて何も見えず、「無駄死になるから引き返せ」と上官が命令したのだと思います。

マフラーとふんどしを受け取った氏本さんは、「今日はもう練習はないので宿に帰って休んでいてください。今夜行きますから」と言いました。

お母様は旅館に戻られました。2時頃だったそうです。これが親子で交わした最後の会話になりました。

氏本さんは、視界が晴れたその1時間後、特攻機に乗って基地を飛び立って行かれたのでした。氏本さんはきっと飛び立つ姿をお母様に見せて悲しませたくなかったのだと思います。だから「旅館で待っていてください。今夜行きますから」と言ったのだと思います。

そして氏本さんは、魂になってその夜お母様のところに行かれたのだらうと私は思っています。その後、お母様は95歳まで長生きされましたが、「あの日のことが人生で一番つらかった」とおっしゃっていたそうです。

## 心の栄養剤No175-②「気にするなよ、おやじ」

三月は卒業式のシーズンである。卒業式といえば、私には忘れられない父との思い出がある。私の大学の卒業式に出席するため、それまで天草をほとんど離れたことのなかった田舎者の父が、一人で博多までやってきたのである。私は驚いた。父は下宿の私の部屋に泊まった。

卒業式の朝、父は大学の門の前で立ち止まり、じっと、門を見つめたまま、しばらく動こうとはしなかった。学部ごとの謝恩会の席で、父と私は一箱の折り詰め弁当を分け合って食べた。そして、一合ビンの日本酒を、交互につき合って飲んだ。父は実に嬉しそうであった。私はその時の父の嬉しそうな顔を、今でも忘れることができない。

卒業式のあとで、私達は親友二人と共に、大濠公園に行った。親友達とも、その日でお別れであった。私は公園のベンチに座って、その親友達との別れを惜しんだのであった。父は少し離れてなぜか寂しそうに、私達を眺めていた。

翌日、父は黙って天草に帰って行った。しかし、その時の父のなぜか寂しそうなお姿が、長い間ずっと、私の心の中から離れなかった。

その父が四年前に亡くなった。亡くなる一年ほど前に、入院して寝たきりになった父が、ベッドの中で、私の手をしっかりと握って言ったのである。

**「お前の卒業式の日あの公園での悔しさは、今でも忘れん。金がなくて皆にジュースを買って、飲ませることもできんかった。本当にすまんかったな。おれは悔しくて、帰りの汽車の中で、涙が止まらんかった」**

父は三十数年もの間、その時のことを、悔やみ続けていたのである。私はその時、八十八歳の父の心の風景をはっきりと見た。そして、卒業式の日の大濠公園での、あの父の寂しそうなお姿を、三十六年たって、初めて理解できたのであった。私は仏壇にかざった父の写真を、しみじみと見ながら

**「気にするなよ、おやじ」**

とあらためて呼びかけている。



3月は、新たな旅立ちを前に、いろんな親子の物語がある時期だと思います。戦時中の極限の時代～まだ貧しい日本で、大学に行ける人が稀だった時代～時代の違いはあったとしても、子を想う親心、そして親を想う子供の気持ちは現代も少しも変わらないと思います！

皆様が、木の芽萌えるなかキラキラと希望にあふれる春を迎えられます事を  
願い祈ります！

※この「心の栄養剤」を遠い昔の話と読んでいたのですが・・・  
私（61歳）がもし20年早く産まれていたら、もしかしたら特攻機に乗っていたかとも思い～もっと日々、感謝の気持ちを持ち、しっかり生きなければと思います！！

